



Title	看護師の小児看護実践の初期経験に関する認識
Author(s)	泉, 美香
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59030
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	いずみ み 香
博士の専攻分野の名称	博 士（看護学）
学 位 記 番 号	第 2 5 2 7 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科保健学専攻
学 位 論 文 名	看護師の小児看護実践の初期経験に関する認識
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 藤原千恵子 (副査) 教 授 永井利三郎 教 授 島田三恵子

論 文 内 容 の 要 旨

研究の背景：看護師は新卒で就職して経験を3年程度積むと、その職場で与えられた職務と役割を果たすことができるようになり、職場で一人前の看護師と捉えられる。看護師は同一部署で3年勤務すると部署異動（ローテーション）の対象となることが多く、これは病院組織の看護管理部門によって看護師のローテーションは同一部署に勤務して経験3年の時期に実施することが効果的である（谷口ら 2001）ことに基づいている。日本の医療社会において、看護師は医師のように一つの専門領域での経験を続けていくことが難しいという状況にある。

Donner G.J. and Wheeler M.M.(2001)によると、看護師は新卒で配属された部署での経験2～5年の時期に今後の専門職としての生き方、つまりこれまで従事してきた専門領域で今後も働くのか、他の専門領域へ変わって経験を積むのかを選択する。また、成人の成長過程のなかで年齢22歳から40歳は成人前期に位置し、特に22歳から28歳は青年期から成人期への移行期であり、この期間の発達の主要課題は一人前の大人になるために生活構造の基礎を築くことにある（Levinson D.J. 1987/南博 訳1992 ; Levinson D.J.1996）。そこで、看護師が新卒で就職して経験2～5年の時期は、専門職としての生き方の選択の時期であると共に成人としての成長過程のなかで社会人として自律していくための基礎を築く為の重要な時期といえる。

小児看護の経験2～5年という初期経験はその後の専門職としての成長に影響を与えると考えられるが、小児看護師に関するこれまでの研究では初期経験の認識は明らかになっていない。そこで、看護師が小児看護の初期段階に経験する認識とはどのような構造なのか、そしてその認識は看護師の個人属性や職務属性による差異があるのか、さらに、初期段階の経験の詳細についても明らかにする必要があると考えた。

研究目的：本研究の目的は、看護師が小児看護実践2～5年の経験に関する認識が看護師の属性要因による差異があるのかを示すこと、さらに小児看護実践2～5年の初期経験の詳細を明らかにすることであった。

研究方法：まず、小児看護実践の経験2年以上の看護師を対象者として小児看護の経験2～5年に経験する

差異があるのかを示すこと、さらに小児看護実践2～5年の初期経験の詳細を明らかにすることであった。

研究方法：まず、小児看護実践の経験2年以上の看護師を対象者として小児看護の経験2～5年に経験する認識の構造とその認識が看護師の属性によって差異があるのかを明らかにするために質問紙調査を実施した。

次に、看護師は小児看護実践2～5年の経験に関する認識を基にしてその後の経験を積むことから、小児看護実践2～5年という初期経験は小児看護師が経験を積み重ねていく上で重要となることから、初期経験を詳細に示す必要があると考えた。そこで、小児看護実践2～5年の看護師を対象として看護師が小児看護実践の初期経験に関する認識を看護師の語りから明らかにするために質的帰納的にデータを分析した。

結果：質問紙調査の対象者は、無作為に抽出された全国の小児科を診療科に有する150床以上の病院105施設に勤務する小児看護の経験2年以上の看護師459名であり、郵送法によりデータを収集した。回答は299名（回収率65.1%）から得られ、有効回答226（有効回答率75.5%）を分析した。調査期間は2008年9月～2009年1月であった。分析結果から、看護師の小児看護実践の初期に経験する認識は【小児看護師としての成長】と【仕事に向かう力】で構成されており、信頼性と妥当性が確認できた。

【小児看護師としての成長】では、子どもに興味がある、小児看護経験6年以上、勤務する部署が外来、部署の特性として小児患者のみを対象とする職務環境である、そして小児看護の実践を経験することへの希望を新卒時と現在の部署への配属時に有し、現時点でも持っている看護師の平均得点が高かった。

【仕事に向かう力】では、現時点で今後も小児看護の経験を積みたいという希望を持っている、部署の特性として小児患者のみを対象とする職務環境で働く看護師の平均得点が高かった。

そして、看護師の小児看護実践の初期経験に関する認識の詳細を明らかにするために、研究対象者を新卒で小児看護の経験2～5年で今後も小児看護の経験を積みたいと考えている看護師として面接調査によってデータを収集して分析を行った。調査期間は、2006年3月～2007年6月であった。データの分析は、継続比較分析の手法を参考にして逐語化したデータから抽象概念を抽出した。研究参加者は12名で年齢23～26歳、すべて女性であった。データ分析の結果、看護師の小児看護実践の初期に経験する認識は9つの下位概念が導かれ、そこから3カテゴリ：『子どもを看たい』『子どもを看る世界にはまる』『小児看護師として揺らぐ』が抽出された。

考察：看護師の小児看護実践2～5年の初期に経験する認識は【小児看護師としての成長】と【仕事に向かう力】から構成されることが示され、小児看護経験6年以上の看護師は【小児看護師としての成長】を経験2～5年の看護師に比べて発展させていること、そして職場組織に前向きに適応して働く気持ちのある看護師は【仕事に向かう力】を高めていることが明らかになっている。これらのことから考えて、看護師が小児看護の経験を積み重ねていくためには、個々人が小児看護師としての知識や技術を習得して専門職として成長していくことと職場に馴染んで働くことに前向きになれるように職場組織での人材管理と教育が行われることが大切であるが、看護師が主体的に専門職としての経験の積み方を意識して実践に取り組む必要があり、看護師の実践と成長には職場組織の要因だけでなく個人要因が影響を与えると考えられる。さらに、看護師が小児看護の経験2～5年という初期段階に経験する認識のコアとは『子どもを看る世界にはまる』であり、これは看護師が小児看護の実践は最も自分にフィットする看護、最も取り組みたいと思う看護という意識を持つことが小児看護実践と専門職として成長していくために必要であることを示している。

そこで、看護師の小児看護実践の初期には実践を振り返って子どもとその家族との関わりから、小児看護の専門性を獲得すること、そしてそこから自分が最も取り組みたい看護について考えることを通して、主体的に専門職としての経験の積み方を考えていく必要がある。

結論：看護師の小児看護実践の初期経験とは小児看護師としての成長と仕事に向かう力という二つの要因から構成され、小児看護実践の初期には看護師が子どもへの興味を持って、ケアすることで小児看護の専門性を獲得し、職場に馴染んで働く努力をしている。そこで、小児看護実践の初期経験においては、看護師が意欲的に取り組みたい看護の領域を明確にして、主体的に専門職としての生き方を選択していく意識を持つという看護師の個人要因が実践と成長に影響していることが示された。

論文審査の結果の要旨

看護師は、国内外ともに病院に就職すると看護の基礎的な能力を身に付けるための教育を受けて一人前の看護師を目指し、一人前と捉えられた看護師は経験2～5年の時期に今後の専門職としての経験の積み方を考え始める。そして、日本ではどの部署でも働くことが可能なジェネラリストナースの育成に重点をおいた看護管理・教育が行われているために、一人前となった看護師は部署異動の対象となり、一つの専門領域で経験を積むことが難しい。

しかしながら、小児看護実践には専門的知識と技術が求められることから小児医療の充実には小児看護の経験を有する看護師が看護に従事する必要がある。そこで、看護師が小児看護実践の経験を積むためには何が重要であるのかを示すために研究に取り組んだ。そして、看護師が仕事を覚えて職務を一人前に遂行できるようになった時期から自分なりの創意工夫をもって小児看護実践に取り組み始めると考えられることから、経験2～5年の時期はその後の経験を積む基盤となる重要な時期と捉えて、小児看護実践の経験2～5年という初期の段階に焦点を当てた。

本研究は、看護師が小児看護実践に取り組み始めた初期の段階における経験をどのように捉えているのか、そしてその捉え方は看護師の個人要因と職務要因による差異があるのかを明らかにすることを目的とした。研究1では、小児看護実践の経験2年以上の看護師を対象として質問紙調査によって看護師の初期経験に関する認識の構造と属性要因による差異を明らかにした。その結果から初期経験の捉え方は経験年数によって異なることが示され、初期経験は経験6年以上の看護師では深まっていたことからその経験は小児看護師が経験を積み重ねるために重要であると考えた。そこで、研究2では経験2～5年の看護師を対象として面接調査を行い、初期経験に関する認識の詳細を明らかにした。

本研究の結果は、病院における看護管理と看護継続教育に活用することができ、小児看護の経験を有する看護師が小児看護実践を積み重ねていくためにその初期段階の経験を重視した人材管理と育成を行い、小児看護師として成長していくことを支援する施策が有効であることが示唆された。

以上のことにより、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと考えられる。